

(別紙 2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 永井 典克

ラシーヌの『フェードル』は、フランス古典悲劇の頂点をなす傑作であるが、その結末でタイトル・ロールのヒロインは毒を仰いで自殺する。ところでフェードルの物語は、ギリシャ悲劇でエウリピデスに取り上げて以来、ローマのセネカ、そして16世紀以降のフランスの悲劇でしばしば取り上げられたが、ラシーヌに至るまでヒロインは、ほとんどすべて剣で自殺していた。本論文の出発点には、どうしてラシーヌが伝統に逆らって、主人公の自死の道具に変更を付け加えたかという疑問がある。さらにラシーヌは劇作家としてデビューしてほどなく、演劇の倫理性を巡る論争に巻き込まれたが、そこでは、小説や演劇が人々の心に「毒を盛る」ものであるか否かが、厳しく問われていた。ラシーヌはそれには否と答えて、劇作家としての活動を続けるが、『フェードル』に至って、悲劇の描き出す情念が罪であることを認めた上で、悲劇はカタルシスの作用によって情念の害毒を癒す薬となることを主張する。

本論は、以上の問題設定から出発して、多数のフランス古典悲劇を渉猟し、その筋立てと登場人物像の造型において、毒がいかなる役割を果たしているかを探求し、その成果に基づいて、ラシーヌの『フェードル』の読み方に新たな照明を当てようとする試みである。全体は、4章構成で、第1章は、他者を殺害する目的で用いられる毒、第2章は、自死に用いられる毒が、個々の作品において、どのような筋立てを作り出し、どのような効果をおいているかを考察する。第3章は、フェードルを主人公とする作品群で、彼女の死がどのように描かれ、演じられたか、またそれはどのような変化を遂げたかを追跡し、最後の第4章で、ラシーヌの『フェードル』における毒の役割を解明する。作品の分析にあたっては、毒の二面性、すなわち毒は同時に薬でもあること、そして作品の中で問題になる毒はたんに身体に作用する物質であるばかりでなく、讒言のように心に害悪を与える言論も毒として捉えられていることに着目して、議論が進められる。その結果として、古典悲劇の展開の過程における筋立てと人物像の変遷が明らかにされると同時に、ラシーヌの『フェードル』を傑作たらしめている神話の重層的構造及びヒロインの毒による自死の意味と劇的効果が浮き彫りにされた。

本論文は、斬新なアイディアに基づいて17世紀古典悲劇の世界に分け入り、その最高峰である『フェードル』について独創的な読み方を提示している。立論の根拠が十分に示されていないところ、テキストの読みに正確さを欠くところが散見されないわけではないが、本論文のもたらした知見は、ラシーヌ研究のみならず、広くフランス古典劇の研究に新鮮な寄与をもたらすものと考えられる。以上から、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。